

たぐろ

TAKUSUI
No. 635

9

September, 2009

発行 (財)兵庫県水産振興基金

兵庫の漁業人のための情報誌



活マダコに歓声をあげる淡路市立山田小学校の児童たち (兵庫県漁業士会主催 干しダコ作り教室)

Report

**近畿・中国・四国漁青連会長会議開催
大輪田塾修了論文発表会開催**

NEWS

兵庫県漁業士会干しダコ作り教室開催

平成22年度農林水産施策の推進に係る 政策提案会開催される



挨拶するJF兵庫漁連山田会長

去る平成21年8月7日、兵庫県土地改良会館において、兵庫県農政環境部の幹部職員並びにJFグループ兵庫水産政策協議会等45名の参加のもと、県主催による「平成22年度農林水産施策の推進に係る政策提案会」が開催されました。

会議の冒頭、農政環境部の伍々部長は、「一般消費者の安心・安全な食品を求めるニーズは強まっており、これは今の水産業界にとっては追い風であり、水産業界の振興に役立てていただきたい。本日、提案いただく課題の中には非常に難しいものもあるが、一生懸命、取り組んでまいります。」と主催者挨拶を述べられました。

これに対し、JFグループ兵庫水産政策協議会を代表して、JF兵庫漁連・山田会長より、「輸入水産物の増大、水

産物価格の低迷並びに燃油や資材の高騰によって、漁家経営は極めて厳しい状況に陥っており、本日、提案させていただく施策が実行されることを大いに期待したい。」と挨拶が述べられました。

引き続き、JF兵庫漁連・山口専務より「水産物に係る食育と地産地消運動の推進」、「豊かな海の再生」、「新しい漁業づくりのための技術開発」の3点を重点的に提案し、これらのテーマを中心に意見交換が行われました。この中で、魚食普及やその情報発信などを目的に、本年7月に発足した「SEAT CLUB」の会員増強に係る支援、学校給食への県産水産物の積極的活用、瀬戸内海の再生に向けた積極的な栄養塩管理などについて、活発な意見が交わされました。

－平成22年度政策提案の内容－

1.水産物にかかる食育と地産地消運動の推進

- ①ひょうご県民と兵庫の海・魚をつなぐ窓口として活動する「SEAT CLUB」の普及・推進への協力依頼
- ②地産地消の給食を拡大していくための仕組みづくり

2.豊かな海の再生

- ①瀬戸内海を豊かな海にするための新法整備の早期実現
- ②豊かな海づくりのための下水処理水における栄養塩の積極的管理
- ③海域の流動に配慮した沿岸域の開発

3.新しい漁業づくりのための技術開発

- ①貝類養殖の新技術・新漁場開発
- ②ノリ養殖業のノウハウ等を活用した新しい藻類養殖の技術開発
- ③漁業者が自ら行う新漁業の技術開発への支援

4.その他

- ①ポスト資源回復計画における公的支援の継続と支援対象の拡大に係る国への働きかけ
- ②需給ひっ迫時における漁業用燃油の安定供給を確保するため、セーフティーネットとしての基金創設の働きかけ
- ③漁業経営安定対策事業にかかる要件撤廃等に係る国への働きかけ
- ④アサリ等二枚貝類の種苗生産技術・放流技術の早期確立
- ⑤県営栽培漁業センターの円滑な運営管理を行うために必要な財源の確保
- ⑥兵庫県内の港湾等に係留するプレジャーボートについて、PI保険(船主責任保険)への全船加入義務化
- ⑦神戸漁業無線局の老朽化した無線設備の更新にかかる費用の一部補助
- ⑧漁村の文化・伝統などを後世に伝える新水産会館の史料展示コーナーの開設協力

豊かな但馬をめざして視察研修 但馬地区漁協青壮年部連合会

7月の1日、2日に但馬地区青壮年部は視察研修を行いました。

今回の視察は、「自分たちが獲った魚がどのように売られているかをしあわせの村で確認する。兵庫県の内海側という比較的身近な加工所、漁協、セリを見学し、魚の扱い方の違いを確認する。内海では似たような年代の漁業者がどのような活動をしているのか。

これらを合わせて、良い悪いではなく、但馬とどんなに違いがあって、今後但馬地区の漁業をよりよくするために、自分たちができることが何かあるのか、まずは見てみよう!」ということが目的でした。

まずは、視察に行ったところを簡単に紹介します。

神戸：しあわせの村ではJF但馬の直売所を視察しました。

姫路：漁連の加工センターでは設立目的や商品、処理能力

などを聞くとともに、加工場の中まで入って見学しました。

明石：JF明石浦では水揚げ～セリまでの流れを見学し、魚のメ方、血抜き、神経抜きについて、行う理由とそのテクニックを教えてくださいました。

AFARでは漁業者が経営するレストランで昼食をとりながら代表の井上さんにお話を伺いました。このレストランは明石港のたこフェリーの乗り場、待合所にあるので、皆さんも明石に行った時は行ってみてください。

垂水のJF神戸市では但馬では見られない船曳網のシラスの水揚げと入札を見学しました。

今回の視察先の中で、特に印象に残ったところ、しあわせの村とAFARについて報告します。

しあわせの村について

ご存じでない人も多いと思いますが、JF但馬の直売所は昨年10月から職員が出張して営業されています。毎週水曜・土曜の10時から営業されており、水曜であれば100人くらい、土曜であれば200人くらいのお客さんが集まります。売り上げはカニがある季節には20～30万円。カニのない季節だと10～15万円になるそうです。

しあわせの村を見て感じたこととして、まずは、集客力の大きさです。但馬でこれだけの人を集められる施設はありません。高齢者の購買力も驚きです。客は切れ間無くやってきて、そのほとんどがおじいさんおばあさんです。施設側からも歓迎されており、施設側が積極的に宣伝してくれているようです。来年には直売所用の建屋を建設してくれるそうで、建屋に移ると火が使えるようになり、その場で調理して販売できるようになるため、商品の幅が広がります。

現在JF但馬は水曜・土曜の営業ですが、日曜の集客は大きいらしく、日曜日を遊ばしているのがもったいないとの声も聞かれました。先ほどの建屋との絡みもありますが、日曜の家族連れをターゲットに、イカめしやかに汁など、但馬で取れる魚をそのまま、その場で調理して販売するなど、魚食普及の観点から、組合と協力して我々が何かできることはないかと、考えるところです。



しあわせの村視察

AFARについて

AFARの言葉の意味を代表の井上さんから伺いましたので紹介します。Aは明石浦、Fはフィッシャーマンで漁師、2つ目のAはアクティブで活動、Rはリサーチで研究です。まとめると「研究」や「活動」を行う明石浦の漁師といった感じです。メンバーは現在9名で、今のJF明石浦の組合長もAFARのメンバーだったそうです。

AFARではAFARが経営するレストランで昼食を食べながら少し話を聞いただけでしたが、その中で感じたこととして、漁師だけで会社を立ちあげ、規模を大きくして、レストランまで始めて…ここまでできるのか～と、素直に思いました。しかも、漁師を続けながら家族の協力もあって商売ができて

いて、商売と明石のPRが一体になっているから、みんなが応援できる。このスタイルは今の但馬には無いものですし、「活動」や「研究」の大切さを我々但馬も見習わないといけないと感じました。



JF明石浦のセリ場見学

まとめ

今回の視察を通じて普段の生活の中で仲間うち・漁師間でもっと多く接点を持たないといけないと感じました。年代は関係なく、コミュニケーションを高めて互いの理解や信頼を高めていくことが大切だと思いました。そういった理解や信頼が、一緒に行動していくことにつながると思います。

もう一つは漁師と組合が協力していくことです。お互いの

協力が、先を見据えた組合組織や行動につながっていくと思います。漁師と組合で協力して、豊かな但馬を作っていければと思います。今回の視察、印象に残った2つを組み合わせると、組合・青壮年部・女性部、みんなが協力して、そういった事業ができれば素晴らしいと感じました。

近畿・中国・四国地区漁青連会長会議開催

去る8月22日(土)に「近畿・中国・四国地区漁青連会長会議」が、兵庫県水産会館において、開催されました。

この会議は、全国漁青連事業の一環として、漁青連の活性化と連携強化を図ることを目的として、各府県持ち回りにより毎年開催されており、今年は本県が幹事となって開催し、7府県の各府県漁青連会長を始めとする約30名が出席しました。

兵庫県漁青連大角会長の主催者挨拶の後、全国漁青連三浦監事・兵庫県水産技術センター三木主幹・JF兵庫漁連山田会長より、来賓の祝辞を頂きました。

今年は、魚食普及・流通対策をテーマとして、まず全漁連広報誌「漁協」に「漁師ほど面白い仕事はない」を連載されている水産ジャーナリストの土井全二郎氏にご講演頂きました。その中で、「1997年頃から全国各地の浜を取材してきているが、最近は流通改革・魚食普及活動に力を入れている所が多くなってきており、厳しい状況の中、これらの課題に取り組まざるを得ない状況になっているのでは」との話がなされました。その後、各県における現在の取り組み状況

を報告して頂いた後、その討論会の中で、魚食普及への取り組みを進める上においては、仕組み作りが重要であり、一般の方に新鮮な魚を安心・安全に提供できるよう努力していかなければならない等の意見が出され活発な討議がなされました。兵庫県漁青連では今後も、さらに関係府県の漁青連と連携を図りながら、活動を推進していきたいと考えています。



漁青連会長会議の様子

平成21年度大輪田塾修了論文発表会開催

8月26日(水)、兵庫県水産会館にて平成21年度大輪田塾修了論文発表会が開催され、山田隆義塾長をはじめ、運営委員や県・系統役職員出席のもと、大輪田塾2期生の2名および3期生4名がそれぞれ任意の研究項目について修了論文を作成し、発表しました。

論文発表者は緊張の中、それぞれのテーマについての研究成果を述べ、質疑応答ではそれぞれ活発な意見交換がなされました。

また、全員の発表後、運営委員の関西学院大学田和正孝教授から「消費者との接点、地産地消など、さまざまな課題に取り組まれた皆さんの発表に我々も大いに啓発された。これからもこの成果を糧に更なる発展と活躍を期待する。」と講評をいただきました。



修了論文テーマと発表者

AFAR(Akashiura Fishermans Active Research) の活動の進化
JF 明石浦：井上 雅夫／指導員：榎本 陽子
ノリの生産と流通
JF 林崎：小松 洋一／指導員：山條 喜宣
貝類養殖に取り組んできて～これまでの取組とこれからの挑戦～
JF 室津：磯部 公一／指導員：山下 正晶
アサリ養殖の現状とこれから
JF 赤穂市：富田 崇史／指導員：岩佐 隆宏
丸山のワカメ養殖について
JF 南あわじ：中尾 満男／指導員：魚住 香織
魚価を安定させるために
JF 但馬：大下 真司／指導員：中岸 明彦



平成21年度コープマリンスクール

協同組合間提携事業として、コープこうべ・JF神戸市・JF明石浦・JF兵庫漁連が毎年実施している「コープマリンスクール」が、今年も7月30日・31日にJF神戸市で、8月6日～8日にJF明石浦において開催されました。



タコのつかみ取り

クイズを交えた魚・漁業の勉強や、タコ・魚のつかみ取り、タコの塩もみ、また、セリ市見学など、漁協ならではの特別な体験できる当スクールは、今回でJF神戸市コースは27回、JF明石浦コースは26回を迎えました。

JF神戸市コースでは、神戸市立栽培漁業センターの協力のもと、ヒラメの稚魚の放流を行い、魚を捕って食べるばかりではなく、魚を増やす大切さも学びました。

また、JF明石浦コースでは、自分達で塩もみしたタコや、旬のアナゴ、エビなどたくさんの魚介類をみんな

おいしく食べ、昼からは親子で「魚の三枚おろし」にも挑戦しました。

初めは怖がっていた子ども達も、お父さん、お母さんの協力を得ながらだんだんと魚に慣れ、目を輝かせながら魚にふれていました。

感想文・アンケートにはつかみ取りやクイズが楽しかったという内容が多く、ほとんどの参加者が次回も是非参加したいとのことでした。



三枚おろしを体験

淡路市立山田小学校で干しダコ作り

兵庫県漁業士会

9月8日(火)～9日(水)の2日間、兵庫県漁業士会(JF育波浦 魚住幸市会長)の主催で淡路島において徳島県・和歌山県の漁業士会との合同研修会が開催されました。この研修会は各県の漁業士相互の交流を図る目的で、毎年、開催されているものです。

近年の消費者の魚離れに対処するため、各県の漁業士会も魚食普及と消費拡大を重点課題と位置づけ、活動を続けているところですが、本年は、洲本農林水産振興事務所の指導普及員の協力で、研修2日目に淡路市の山田小学校(旧一宮町)において、全校児童40人を対象とした「干しダコ作り」を実施しました。山田小学校は文字どおり静かな山の中にあり、毎年、希少鳥類のアオバスクがやってくる学校として有名です。

生徒たちの目の前に、いきなり生きたタコを「ハイっ、これ!」。とたん

に「ひゃ〜!」「キャ〜!」。最初はものすごい悲鳴が上がりましたが、すぐに子どもたちは興味津々、好奇の眼に変わり、講師先生の話を一語一句も漏らさぬよう熱心に聴くようになりました。その後、1人ずつ生きたタコを手渡しし、干しダコ作りに挑戦です。

3県の漁業士さんたち10数名は、汗だくになって干しダコ作りの指導にてんてこ舞い。その甲斐あって、子どもたちは手ぎわよくタコをさばき、竹を通して次々と形に仕上げていきました。

消費者の魚離れを食い止めるためには、このような地道な活動の積み重ねが欠かせません。漁業士会の皆さんの今後の活躍が期待されるところです。



天日干して出来上がり

漁業士の指導でタコの内蔵取り



豊かな海へ！蘇生のカンフル剤はあるのか？

大阪湾の環境再生を考える フォーラム開催

— 瀬戸内海研究フォーラム in 大阪から —

瀬戸内海研究会議（松田 治会長）主催の瀬戸内海研究フォーラムが今年も9月3、4日の2日間、大阪ワールドトレードセンターで開かれ、参加した官学民の環境関係者約200人から大阪湾の水環境について熱い討論が行われました。



フォーラムの様子

このフォーラムは、自然科学だけに偏らない学際的な集団をめざし、大学等教育研究機関、国公立試験研究機関及び企業内専門研究員など約180会員で構成されている瀬戸内海研究会議が、瀬戸内海環境保全知事・市長会議、(社)瀬戸内海環境保全協会の協賛を得て毎年開催されています。今年は「大阪湾沿岸域水環境の再生と新たな創出—大阪的文化からのアプローチ—」をテーマに、高度経済成長を背景に埋め立て等で干潟・藻場が喪失し、自然海岸はコンクリート護岸と化し、生物にとって過酷な環境にある大阪湾を、何とか蘇生させるカンフル剤は無いのか？と、5つのセッションで19件の研究・活動発表と活発な意見交換が行われました。また、今回のフォーラムでは難しい行政言葉や学術用語の講演だけでなく、古代ないわ浪漫の語部（かたりべ）や落語家、そして現役の漁業者など多彩な顔ぶれが活動発表者に加わり、テーマ通り“大阪的”な雰囲気で行われました。また、今回のフォーラムでは難しい行政言葉や学術用語の講演だけでなく、古代ないわ浪漫の語部（かたりべ）や落語家、そして現役の漁業者など多彩な顔ぶれが活動発表者に加わり、テーマ通り“大阪的”な雰囲気で行われました。

いま、瀬戸内海では生物的視点からの環境再生を図るため、瀬戸内海再生法の制定を求める140万人署名運動などで国会対策を進めており、漁業者もその推進に一翼を担い、あらゆる機会を通じてその重要性を世論に訴えているところですが、瀬戸内海で生業している漁業関係者にはまだまだ意識に温度差があり、運動の趣意など認識を深める努力が必要です。瀬戸内海研究会議の環境フォーラムは、漁

業者が漠然とイメージする瀬戸内海の環境再生に明確な道標を示されることも多く、より沢山の漁業関係者が参加されることを願っています。

「瀬戸内海研究フォーラム in 大阪」課題

第1：大阪湾の沿岸域水環境の再生とは

1. 国家戦略としての自然再生
2. 大阪湾における再生行動計画の取り組み
3. 水都大阪の河川環境再生事業
4. 大阪湾再生に向けた市民との連携と協働

第2：大阪湾区域における海域環境の再生・創造に係る研究の助成事業の成果報告会及び環境保全創造に関する研究活動報告

— テーマ1及び2：32課題 —

第3：大阪湾の原風景を求めて

1. 大阪湾の海と人との関わり
2. 聖なる黄金の海 古代大阪湾ミステリー
3. 庶民の海？大阪湾
4. 大阪湾のメタボ対策？
5. 落語「瀬戸内海のサメの話」

第4：生物生産の場としての大阪湾の再生

1. 人工水域の順応的保全と再生
2. 大阪府の人工護岸と生物多様性
3. ほんまモンの漁師から見た大阪湾
4. 食文化から見た大阪湾

第5：大阪湾再生に向けたフレームとビジョン

1. 大阪湾におけるグリーンベイの形成と活性化
2. 廃棄物の適正処理と大阪湾の活性化
3. 大阪湾再生に必要な環境再生技術開発の取り組み状況
4. 大阪湾再生のための構想とNPOの役割



水産大学校理事長 鷺尾圭司氏の講演

オリジナル菊完成！ 三木市花き品評会を開催

三木市と三木園芸組合は8月3日、三木市役所みつきいホールで平成21年度三木市花き品評会を開催しました。

輪菊やスプレー菊、ユリなど計87点が出品され、兵庫県知事賞には今枝和也さん(志染町戸田)が生産した菊(品種：世紀)が選ばれました。

今枝さんは「今年は6月に日照りが続き、7月も雨や曇りの日が多く栽培管理に苦労したが、このような良い賞を受賞できてうれしい」と喜びを話していました。

また、今年の品評会では三木オリジナル菊の出品もあり、奥野昭春さんが生産した「夢美人」が兵庫県議会議長賞に輝きました。

この「夢美人」は、同JA三木花卉部会が地域オリジナル菊を育成しようと、平成17年より県立農林水産技術総合センターや県花卉協会と育種事業に取り組み、完成した新品种のうちのひとつ。品評会やイベントなどで消費者に対するアンケートを行い、市場関係者や生産者の意見をもとに試行錯誤を重ね、新たに「夢花火」「夢みらい」など3品種が完成しました。

今後は他の菊との差別化を図りながら、産地の活性化につなげていくこととしています。



夢美人



夢花火

夢みらい

<http://www.ja-hyogo.or.jp/>

園田学園女子大学生生活協同組合 生協生誕祭「七夕まつり」を 開催しました

園田学園女子大学生協は、1995年阪神淡路大震災の夏に創立し、今夏で14年目を迎えました。生協の誕生日を記念して毎年、「七夕まつり」を開催しています。学生、教職員をはじめ、この時期短期留学をしている台湾開南大学からの留学生、付属幼稚園の児童・保護者・ご家族、近隣住民の方々にも参加して頂くお祝いの祭りです。今年は7月10日に“開花亭”(生協食堂ホール)で開催し、約350人の方々の来場で賑わいました。

会場では模擬店あり、ステージありでとても盛り上がりました。特に、恒例の盆踊りは留学生の方も先生の振り付けを見よう見まねで踊っていただき、笑い声の絶えない楽しい盆踊りとなりました。少しでも国際交流に役立てたのではないかと思います。同時に恒例の健康チェック(肌年齢、体脂肪)も大賑わいでした。

生協学生委員は約2ヶ月前から企画、渉外、物品調達などの準備をしてきました。また県下の大学生協学生委員の皆さんも40数名応援に駆けつけて頂き成功することができました。

年に一度の文字通り“七夕の夜”にふさわしい楽しい宴でした。永遠に続くことを願っています。



<http://www.coop-hyogo-union.or.jp/>

旬に想う

写真と文
遊方子

花を食べる

◆料理の彩りにつまものを飾る。山椒の若芽、アサツキ、紫蘇、アユタデ等を使う。東京足立区はつま野菜栽培で知られる。可愛い花キュウリや春先のツクシやタンポポも眼で料理を味わう。料理を飾り食べる花として、菊や春蘭や菜の花は以前からあった。最近のエディブルフラワーという考え方は、もっと積極的に花を食べる事にある。発祥地アメリカからヨーロッパを経て、日本へと広まって来たが、スイートピー・パンジー・キンセンカ・キンギョソウ・デンドロビウム・バラ等、20種70品種が食べられるという。ナスたちウム・コーンフラワーは、サラダに入れたりドレッシングの香りづけに使われる。

◆菜園では食用菊を栽培して2年になる。通信販売のカタログで苦みの少ない種類を選んで2株を買った。初夏から黄色の花が咲き、生け花にも使えて重宝している。この花弁を摘んで、熱湯を潜らせ酢の物にすると、歯触りが良くて菊の香が楽しめる1品になる。マヨネーズと醤油を混ぜた和え物もいい。ポテトサラダに少し多めに混ぜると、菊の風情を生かした面白いものになる。食用菊は冷涼を好み、東北地方や新潟で栽培し、青森の「阿呆宮」や山形で「蔵王」という銘柄が知られる。食用だから無農薬で育てるのがいい。

◆カリフラワーはブロッコリーと同じキャベツの仲間、ハナヤサイという別名通り花蕾を食べる野菜である。菜花(ナバナ)は、

チリメン白菜を改良したもので、蕾のうちに摘んで利用し、茹でてゴマ和え・味噌和え・白和えなどが美味しいが、熱湯でサッと茹でて鰹節をかけたものに、醤油で味付けしたお浸しも簡単に実が旨い。最近は1年中食べられるが、黄色が少し出た露地もの花蕾を摘んで、食卓に早い春を演出したいものだ。

◆オオシマザクラの葉を塩漬けにしたものを「桜餅」に使うが、「さくら湯」は塩漬けの桜の花を使っている。結婚式場の控え部屋で、時間待ちに《さくら湯》が出た。茶碗に塩漬け花を入れて湯を注ぐが、仄かな花の風味があって優雅な気分になる。「関山」という桃色系の品種が使われる。欲張って花を2個も入れたら辛くて飲めたものじゃない。独特の香りはクマリンという成分の作用というが、茶にしたアイデアが素晴らしい。シュランの花も同様に茶に使える。茶碗の中で花が開くように思えて楽しいが、冬季を切り抜け、やっと開花したのを摘むのは少し決断が要る。雑木林から移植した株が増えて、毎年数本の花をつけている、シンビジュームの仲間なのだ。



コスモス (加西倉谷にて)

大輪田塾だより

【平成21年度大輪田塾県内宿泊研修】

8月の大輪田塾は、4～5日の2日間、宿泊研修が昨年に引き続き但馬地区で実施され、3期生4名、4期生2名が参加しました。

4日はJF浜坂町を訪問し、「JF浜坂町の取組」と題してJF浜坂町仲村部長、「漁船漁業構造改革総合対策事業について」と題して但馬水産事務所中岸課長による講義が行われ、夜にはイカ釣り体験実習も行われ、充実した時間を過ごしました。5日は諸寄支所にて朝市を見学した後、但馬水産技術センターに移動し、竣工したばかりの県調査船「たじま」を見学し、「但馬のこれからの水産試験研究のあり方」と題して但馬水産技術センター廣瀬所長、「水産物の消費拡大対策について」と題して但馬水産事務所眞鍋専技による講義が行われました。特に今回の研修では、生産体制の強化や流通、販売力強化など、弱体化した水産業界を活性化するために水産庁や兵庫県が行う事業についての講義が多く行われ、塾生はその内容に注目し、所属する漁協や自身の漁業活動でこれらの事業を適用した場合の効果についてなど、盛んに質疑応答を繰り返していました。



イカ釣り体験実習



新調査船「たじま」の見学

表紙の言葉



「活マダコに歓声をあげる淡路市立山田小学校の児童たち」

9月9日に兵庫県漁業士会が淡路市立山田小学校で開催した干しダコ作り教室。児童たちの珍しそうに見上げる表情が大変印象的です。